

教材の機能という観点から捉えた韓国伝統音楽の授業構成

—韓国における小学校での授業観察を通して—

金 奎 道*

(平成26年6月17日受付, 平成26年12月1日受理)

A Study of Teaching and Learning in Korean classical music based on the viewpoint from the function of teaching materials :

Focusing on practical education in the case of the Korean elementary school

KIM Gyudo*

As for today's children, a court music is far removed from everyday life and neither can it be said that it is closely related to any experience. Therefore, it can be said that there is also much incongruity with the musical language that children have acquired in terms of rhythm, tone, and form. However, such a court music is actively introduced into the education process from the elementary school stage in South Korea.

This research analyzes music education in Korea that includes court music in its teaching materials such as *Daechwita* and *Jongmyojeryeak*. If one has an opportunity to come into contact with the court music from a young age, a positive attitude towards traditional music that one is not used to hearing will be developed, and a reluctance to get into a new music will also disappear. In this respect, it can be said that this research has gained some clues to the study of the court music such as the court music of Japan and Noh play from the elementary school stage in Japan also, taking the inquiry into South Korea's case as a mirror.

Key Words : Music Education, Traditional Music, Teaching Material of Music, Korean classical music

I はじめに

1. 問題の所在

2006年、60年ぶりに教育基本法が全面改訂され、伝統と文化の教育の重要性が強調されている。今後の各教科等の具現化をめぐり、中教審答申における芸術系教科目について「伝統的な文化にかかわっては、音楽科や図画工作、美術科では、歌謡や民謡、郷土に伝わる歌、和楽器、我が国の美術文化などについての指導を充実し、これらの継承と創造への関心を高めることが重要である」⁽¹⁾と説明されている。このことから学校教育においては伝統と文化に関する教育がこれからもますます期待される。しかし、2011年より順次実施されている学習指導要領では伝統音楽が一層重視される一方で、中学校で新たに導入された「伝統的な歌唱」や共通事項の「間」、「序破急」など、伝統音楽への対応に戸惑う教師も少なくない⁽²⁾。

そこで筆者は、学校音楽教育において自国の伝統音楽を重視し、その重みにおいても日本における伝統音楽の割合をはるかに超えている、韓国の音楽教育に注目した^(注1)。韓国における伝統音楽（以下「国楽」）教育への意識は、

1992年第6次教育課程から1997年第7次教育課程に至るまで急速に増加し、現在は自国の伝統音楽の割合が4割に達するほど音楽教育の重要な位置を占めている⁽³⁾。

以上より、日本の伝統音楽の教材開発および授業プログラムの作成^(注2)の一環として、韓国の学校音楽教育を視野に入れ、2012年より国公立の中小高校における国楽教育の授業実践を観察し、実状を把握した。小・中学校での授業実践の調査研究を立案する際には、特に国楽の教材^(注3)に注目し、表現と鑑賞の領域において多種多様な分野の音楽を観察することを念頭に置き、調査に臨んだ。

2012年の調査の対象は、短簫（タンソ：尺八の類）や伽倻琴など伝統楽器を扱った器楽授業、伝統芸能パンソリとカンカンソレを取り入れた歌唱授業、および行進曲風の軍礼楽である大吹打（テチタ）を教材とした鑑賞授業があり、ほかにも打楽器アンサンブルであるサムルノリや国楽管弦楽団員の指導によるクラブ活動など多岐にわたった。

これらの調査結果から、日本の伝統音楽教育と大きく

* 鳴門教育大学大学院学校教育研究科研究生（Research student of the Graduate School in Science of School Education, Naruto University of Education）

異なる特徴の一つとして、韓国における音楽教育では低年齢から様々な国楽を学んでいることが挙げられよう。小学校段階から既に国楽の全般を学び、伝統楽器に親しみ、長短(チャンダン)^(注4)、伝統的な発声法、先後唱、装飾音であるシギムセといった音楽用語やそれらの演奏も小学校3年生から学習していることを改めて確認することができた⁽⁴⁾。

さらに、韓国では小学校から《大吹打》や《宗廟祭礼楽》など、宮廷音楽を含む職業的専門家による音楽(以下「古典音楽」と総称)を教材として使用している。一方、日本では、後述するように、これらに対応する能楽や雅楽などの音楽は主に中学校から用いられ、小学校では民謡やわらべ歌、郷土芸能、諸民族の音楽など、多くは民衆が伝えてきた音楽(以下「民俗音楽」と総称)を扱っている。

そこで、本論では韓国で観察した古典音楽の授業実践のうち、小学生の児童を対象とし、《大吹打》と《宗廟祭礼楽》を教材とする授業を取り上げる。《大吹打》は朝鮮時代に王の城外出御、高官の出入、軍隊の凱旋などに使われた軍礼楽であり、《宗廟祭礼楽》は朝鮮時代の歴代王と王妃の位牌を祀る宗廟で、祭礼が進行される間に行われる歌、舞踊、音楽を言う。

本論におけるこれらの古典音楽は、現在の子どもの生活とは遊離し、子どもの経験と密接な関わりをもつとは言い難い。さらに、児童がそれまで受容している音楽とはリズムや音色、様式の面で不一致度が高いこともいえる。大元・澤田は「日本音楽の受容の過程は、児童がすでに得た音楽的語法により、その不一致を解消していく過程」⁽⁵⁾であると、古典音楽の学習の特徴を示している。

2. 先行研究の検討

(1) 古典音楽の学習

これまで、小学生の児童を対象に雅楽、謡曲などの古典音楽の学習の可能性を試みた研究は幾つかある。

伊藤ほか⁽⁶⁾は、小学校の授業開発において、まず筆箒を想定にストロー笛を制作することで、ダブルリードの音の出る仕組みについて理解することを目標とした。そして、筆箒の音色の特徴を学習の入り口とし、筆箒の役割を理解することで雅楽の学習に繋げた。このように、教材に興味関心をもたせるために楽器づくりを取り入れることは授業構成の特徴であると言えるが、ここには児童と教材との関わり合いについては特に言及されていない。

一方、古典音楽の学習を鑑賞という形態に留まらず、表現を取り入れる活動を構想することによって、教材との相互作用の観点から論じた例がある。大元・澤田⁽⁷⁾は、雅楽《越天楽》を教材として、小学校6年生の児童を対象に旋律を聴取し、再現するという学習活動を実施し、その過程でなされた発言と感想等の記録、再現された旋

律、および記譜を分析した。それらによって、児童が唱歌譜をどのように扱い、拍をどのようにして認識するかという側面が明らかになった。

また、小学校5年生を対象として謡曲《船弁慶》の旋律を聴取しながら詞章と照合させつつ、再現するという学習活動を実施し、児童がその旋律を受容していく様子を総合的に考察した⁽⁸⁾。その結果、児童の旋律受容の過程からは見落とされたものや誤って認識された音構造などが明らかになった。

以上の先行研究は、学校教育において古典音楽を取り上げる際に、規範旋律の提示の仕方や教材の選択といった点について示唆を与えているものの、教材に着目し、教師と子どもとの関係構図の中で、教材がどのように機能しているのかに注目している研究ではない。

(2) 教材の機能

一般的な教材の概念は「一定の教育目的に従って選ばれた教育内容を学習者に教える際の材料となるもの」⁽⁹⁾とされる。これには、学習過程において必要とされる具体的な課題や活動における素材という意味合いが含まれている。

このような従来の教材論から脱し、教師と子どもの間に存在し「教育における探究の題材となるもの」⁽¹⁰⁾といった実践概念として捉えると、子どもの経験の発展というものが明確に見えるのではないだろうか。こうした教師と子どもの関係性に基づいた教材の機能を論じた研究を幾つか挙げてみる。

八木⁽¹¹⁾は、音楽科における教材の働きとして3つを例示する。まず、音楽作品が教材の中核となる多くの場合、表現や鑑賞の対象としての教材と音楽概念を獲得させるための教材が機能するという。ここでは教材がもつ表現的特質が教育内容の重要な鍵となることは間違いない。ところが、生成する場としての教材を考えた授業では、「学習者にとって興味を喚起するような豊かな学習活動の提起が『場』の実体を形成」⁽¹²⁾し、「触発されて教育内容を子どもたちが生成する」⁽¹³⁾といった教師と子ども、あるいは子どもと教材との相互作用による生成の過程がみられると述べる。

こうした生成性を重視した授業はどのような特徴があるのだろうか。例えば、来迎芸術を用いた教材・プログラム開発⁽¹⁴⁾における教材の機能は、思考力・判断力・表現力が一体的に展開される学習過程そのもの、とされる。すなわち、教材はあくまで授業者のねらいと子どもの認識をつなぐ中間的・媒介的役割を果たすものであり、学習者にこちらが目標とする行動を求めるのではなく、多面性を期待することに意味があるものと考えられる。

また、小島・兼平⁽¹⁵⁾の音楽科における「図形楽譜づくり」の教材性を明らかにした研究では、「図形楽譜の機能は、

音とイメージの間に介在し両者をつなぐ点にある」⁽¹⁶⁾と述べられている。この教材がもつ機能によって、音楽の質的側面と楽曲の部分間の関連性が意識され、さらに質的な媒体による共感的コミュニケーション作用を活性化するとまとめている。

上記の先行研究に共通するところは、教師が教材解釈により教育目標を定め、教育内容を構成したあと、子どもに課題を与えるとといったトップ・ダウン式の授業構成ではないことに特徴がある。つまりは、学習者の思考過程に重点を置きつつ、教材は子どもの経験の発展に機能するものであり、授業者と学習者の関係構造に基づいた実践概念として捉えているといえる。

もちろん、後述する韓国での授業観察が必ずしもこうした教育観に基づいた授業実践であるとは限らない。しかしながら、古典音楽を教材として積極的に取り入れている韓国の授業実践を教材の機能に焦点化することによって、子どもと教材との関係構造や授業構成の在り方が見え、日本の伝統音楽教育への示唆が明確にされるものと期待できる。

3. 研究の目的と方法

以上のことから本論では、児童の音楽的語法とは不一致度のきわめて高い音楽であり、かつ子どもの生活経験とは切り離された古典音楽を小学校の段階から教育課程に積極的に編成している韓国の国楽教育の特徴を探ること、日本の伝統音楽教育への示唆を得たい。具体的には《大吹打》と《宗廟祭礼楽》という専門家が伝承する国楽の教材を扱う授業では、指導内容がどのように形成されているのか、そして教材がどのように機能して子どもの経験を広げ、かつ深めていくのだろうか、という面から考察することにより、古典音楽の授業構成の在り方を明らかにすることを目的とする。

研究の方法は、以下のとおりである。

- 1) 本論における基礎研究として不一致理論について叙述する。
- 2) 不一致理論から得られた知見を基に、教材の機能から授業分析の視点を導き出し、韓国で観察した古典音楽の授業実践を分析する。
- 3) 授業分析をふまえ、古典音楽がもつ教材の特質に根ざした学習について考察する。

II 音楽聴取における不一致理論

前述した「不一致」とは、不一致仮説 (incongruity hypothesis)、すなわち内発的動機づけで有名なハント (Hunt, J. McV) によって提唱された理論に依拠するものである。ハントによれば、不一致とは「新しく入ってくる情報と、情報処理機構の状態との間に不一致 (incongruity) があるときに情動的反応が起こり、この不

一致が大きいほど、反応の程度が強い」⁽¹⁷⁾と述べている。こうした音楽の情動に関わる認知過程は、音楽の意味と情動の理論を構築したマイヤー (Meyer, L. B.) が『*Emotion and Meaning in Music*』において論じている。マイヤーによれば、「感情あるいは情緒は、音楽的な刺激状態により活性化される予想、つまり、反応しようとする傾向が一時的に抑制される、または恒久的に妨げるときに生ずる」⁽¹⁸⁾と述べている。要するに、音楽に対する反応は人間がすでに慣れ親しんでいる原型構造 (archetype) にあてはめて起こり、期待からの遅延、逸脱により情動的反応が喚起されるものと考えられる。

波多野・久原は、マイヤーから発展されたハントの理論を基盤としながら、音楽に対する情動的反応をまとめている。彼によれば、音楽に対して生ずる反応の一部は、素材としての音 (音色) にあるとみており、その上、音の組み合わせ、音のパターン、そこに存在する規則性が音楽に対する情動的反応の主要な源であると見なしている⁽¹⁹⁾。

また、波多野・久原は音楽作品への好みを規定する要因としてこの不一致を重視している。つまり、ある曲をくり返し聴くことによって、不一致度が減少していき、親近感が増大するようになる。もちろん、あまりくり返し呈示すると、かえって退屈や飽きを感じさせることもありうるため、最適水準に至るまでの過程が重要であると指摘する⁽²⁰⁾。すなわち、これは好みに対するくり返しの効果を予想することであり、くり返しは好みの増加と減少につながることを示している。

ハーグリーブス (Hargreaves, D. J.) は、これを、音楽における熟知性と好み (選好性) の関係で究明し (図1)、バーライン (Berlyne, D. E.) の逆U字型曲線の理論を支持するものとして裏付けた。

もちろん、音楽的好みは「音楽に特有の性質や、聴取状況だけでなく、年齢やジェンダー、社会文化的な背景などの個々人の変数にも影響される」⁽²¹⁾とオルソン (Olsson, B.) も指摘する。したがって、こうした音楽における発達心理学の研究は、音楽教育においても示唆さ

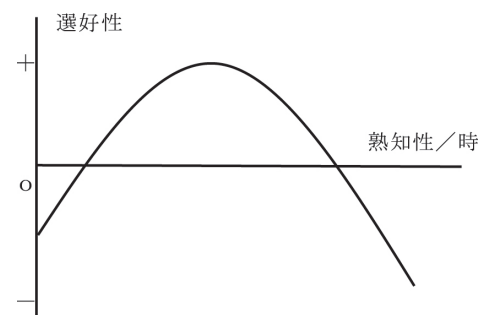


図1 逆U字型曲線^(注5) (選好性を熟知性と時に関連付けたColman & Hargreavesによる仮説的曲線)

れる部分が多い。

要するに、音楽聴取に対するこれらの研究は、音楽への馴染みが好みへと導かれるにあたって、音（音色）、複雑さ、テンポ、様式などが重要な要因として働くことを説明している。さらに、音楽の好みに関連するこれらの多様な要因を最適水準に達するまで反復提示することによって快の情動的反応を引き起すことも明らかにしている。

ここで、学童における音楽的発達の研究をまとめたハーグリーブスは、音高の弁別・絶対音感・調性の獲得などの旋律的技能や和声的技能は学齢期により発達すると報告している⁽²²⁾。とりわけ、音楽的な趣味や選好に対する研究では、「音楽的な経験のある被験者は、音楽的な経験がない被験者に比べ、研究されたすべてのタイプの音楽（クラシックとポピュラーを含む）を全般的により好む傾向があった」⁽²³⁾ということが明らかになっている。

しかし、これら年齢の要素を音楽の嗜好に関連づけた研究は、主に西洋の芸術音楽を調査対象としたものであり、さらに、日韓における音楽教育関連の研究には社会心理学の立場から古典音楽への馴染みを年齢の面から調査した研究は見当たらないため、これから、縦断的方法を用いた発達研究が求められるだろう。

これまで得られた知見から、学齢児に古典音楽の学習を試みる本研究においては、幼い頃から伝統的な響きに触れる機会が増えると、耳慣れない音に対しても肯定的な感情をもち、小学校の段階でも古典音楽の学習が可能になるという立場から研究をすすめる。なぜなら、雅楽など日常では体験し難い音楽こそ、小さい時から少しずつ親しむことが必要だからである。それは、不一致理論にも示されているように歳を重ねるにつれ、新たな響きは受容しにくくなるためである。

Ⅲ 教育課程にみる古典音楽の学習

1. 日本の音楽科教科書にみる古典音楽

それでは、日本の音楽科教科書において、古い伝統をもち、主に職業的専門家により軌範が確立された音楽、いわゆる古典音楽が教材として占める割合をみていく。

平成20年改訂の小学校学習指導要領には、日本の伝統音楽に関して、「和楽器の音楽を含めた我が国の音楽や諸外国の音楽など文化とのかかわりを感じ取りやすい音楽、

人々に長く親しまれている音楽など、いろいろな種類の楽曲」と明示され、鑑賞教材は「(前略)和楽器による音楽、雅楽、歌舞伎、狂言、文楽の一場面などを含め多くの人々に親しまれている我が国の音楽」と教材選択の観点が見られているものの、実際に小学校の教科書には、わらべ歌や民謡以外には取り上げられていないことが現状である。

平成20年改訂の中学校学習指導要領における日本の伝統音楽に関する記述には、「民謡、長唄などの我が国の伝統的な歌唱のうち、地域や学校、生徒の実態を考慮して、伝統的な声の特徴を感じ取れるもの」と表現活動における教材選択の観点が見られ、伝統音楽に関する教材の作成が小学校に比べ、より積極的に行われている。2012年出版の音楽科教科書（教育芸術社『中学生の音楽』、教育出版『音楽のおくりもの』）を概観すると、箏と尺八の音楽、歌舞伎と文楽の音楽、雅楽と能の音楽が教材として順次示されている（表1参照）。

このように伝統音楽については、小学校では民俗音楽、中学校から古典音楽の教材がそれぞれ取り上げられ、事実上、古典音楽の指導が中学校から始まるようになってきている。なお、旧学習指導要領では三味線音楽（語り物）、能楽、琵琶楽は高等学校「音楽Ⅱ」の「内容の取り扱い」に示されるもので、これらの指導が現行学習指導要領からはより早い段階から行われるようになり、日本でも古典音楽の早い段階での学習を重視するようになってきたことが見て取れる。

2. 韓国の小学校音楽科教科書にみる古典音楽

韓国では、2007年改訂教育課程から初等教育において検定教科書制度が導入され、中学年までは国定教科書1種であるが（2009年改訂からは中学年の教科書も検定制となり、第3～4学年合本音楽教科書6種がある。）高学年の場合は、第5年生は3種、第6年生は5種の教科書がそれぞれ検定審議会の審議を経て刊行されている。これらの教科書に掲載されている古典音楽を表2に整理し、概観する。

表2をみると、《霊山会相》などの饗宴用楽舞と《宗廟祭礼楽》などの祭祀用楽舞を含めた宮廷音楽、いわゆる雅楽が高学年から伝統音楽の教材として取り上げられていることがわかる。他には、パンソリや唱劇などの劇音楽、

表1 日本の中学校音楽科教科書にみる古典音楽

	教育芸術社『中学生の音楽』	教育出版『音楽のおくりもの』
第1学年	箏曲《六段の調》尺八曲《巢鶴鈴慕》	箏曲《六段の調》尺八曲《鹿の遠音》
第2・3学年 上	歌舞伎「勸進帳」長唄《勸進帳》 文楽「新版歌祭文」より“野崎村の段”	雅楽《平調越天楽》長唄《勸進帳》 琵琶楽
第2・3学年 下	雅楽《平調越天楽》 能《羽衣》	能《羽衣》キリ後半「東遊びの数々に～」 文楽「義経千本桜」より“大物浦の段”

表2 韓国の小学校音楽科教科書にみる古典音楽

〈第3学年〉	〈第4学年〉	〈第5学年〉 検定教科書		
鶴舞（宮廷舞踊）	伽倻琴の併唄「鳥の打令」 大吹打 大笏の独奏「清声曲」 短簫の独奏「細霊山」	【金星出版】 千年万歳の中「両清環入」 平調会相の中「打令」 巫楽と梵唄（宗教音楽）	【天才教育】 器楽／絃楽霊山会相 声楽／歌曲 宗廟祭礼楽と梵唄（宗教音楽） 三絃六角の中「チャジン打令」 霊山会相の中「打令」	【図書出版太星】 絃楽霊山会相の中「打令」 宗廟祭礼楽と巫楽と梵唄 （宗教音楽） 寿斉天
〈第6学年〉 検定教科書				
【天才教育】	【金星出版】	【太林出版】	【図書出版太星】	【未来&カルチャー】
伽倻琴と大笏の散調 パンソリと唱劇（劇音楽） 時調唱 大吹打、寿斉天、宗廟祭礼楽（宮廷音楽）	短簫の独奏「清声曲」 伽倻琴の散調 大風流「折花」 時調唱 パンソリと唱劇（劇音楽） 宗廟祭礼楽 寿斉天	平調会相の中「細霊山」 パンソリと唱劇（劇音楽） 時調唱 宗廟祭礼楽 与民楽 大吹打	宗廟祭礼楽 大吹打 パンソリと唱劇（劇音楽） 時調唱 短簫と奚琴の併奏 短簫と洋琴の併奏	パンソリと唱劇（劇音楽） 寿斉天 伽倻琴の散調 時調唱 宗廟祭礼楽 梵唄

大笏・短簫といった伝統楽器の独奏曲、あるいは伝統楽器の二重奏にあたる併奏など多様な楽曲を小学校の段階から教材として取り入れている。それは、伝統的な響きに対する児童生徒の音楽的経験を拡大、深化、洗練させようとする意図があると見て取れる。ただ、既述した楽曲は鑑賞活動の教材であり、その他の歌唱活動の教材としては、固有の定型詩に長短に合わせて歌を歌う時調唱だけに留まっているが、このことは国楽学習のこれからの課題であると考えられる。

IV 古典音楽の実践事例にみる教材の機能

分析においては、授業過程をビデオによる映像記録として残し、それに基づいて授業の様子を時系列に沿って逐語的記録を作成した。実践記録には、授業者によって提供された学習指導案、児童によって作成されたワークシートがある。そして、授業観察のあと、授業者に実践の振り返り、教授学習における教育的意図、子どもの国楽に対する興味関心など学習実態を問うインタビュー調査も分析の資料とする。


学習活動中から分析の対象とする場面は、子どもと教材の関係構造がみられる場面と古典音楽の学習を特徴付ける場面である。抽出理由は、この場面が、子どもと教材との相互作用による生成の過程が見えるからである。

分析の方法としては、教材の機能に着目し、①古典音楽の教材は子どもの経験の発展にどのように機能するか、②子どもは教材とどのように関わりあっていたか、という視点で分析を行う。

1. 古典音楽の実践事例その1《大吹打》

(1) 教材《大吹打》について

韓国の重要無形文化財に登録されている大吹打は、朝鮮時代に王の城外出御、高官の出入、軍隊の凱旋などに

使われた軍礼楽である。吹打手は、雀羽の草笠を被り、黄色い天翼を着、藍纏帯をしている。大吹打の演奏において指揮者の役割をする執事が「鳴金一下大吹打」（鉦の合図で開始するという意味）と指図をすると、吹打手が鉦を一回鳴らし、龍鼓が  とリズムを打ってから音楽が始まる。また終わる際には、執事が「喧譁禁」（喧しい響きを止めなさいという意味）と号令をかけると音楽が止まる。12/4拍子20長短、7章で構成されており、反復形式をもつ。勇壮な行進曲の音楽であり、軽快さと威厳が感じられる。管打楽器で合奏する大吹打の編成には、喇叭（ナバル）・螺角（ナガク）などの管楽器と鉦（ジン）・大鼓（テゴ）・杖鼓（チャンゴ）・龍鼓（ヨンゴ）・嗜啍囉（ジャバラ）などの打楽器、そして唯一旋律を奏でる太平簫（テピョンソ）が使われている⁽¹⁹⁾。

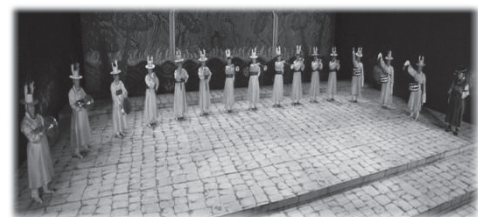






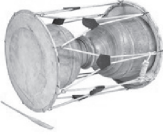


図2 大吹打の演奏様子（国立国楽院正楽団）

(2) 授業実践の分析

分析対象の授業は、韓国I市公立K小学校（4年生20名）で、2012年10月12日に1時間実施した大吹打の学習である。韓国における国楽教育では、小学校3年生から伝統的な楽器に親しみ、音楽用語を学ぶことは既に述べた。しかし、これまでの音楽学習を通してこの年齢の子どもに蓄えられ習得されたものは、やはりわらべ歌や民謡を中心とした民俗音楽への理解と考えて良いであろう。

表3 大吹打の編成楽器 (注6)

	楽器	楽器の説明		楽器	楽器の説明
管楽器	 太平簫 (テピョンソ)	別名は胡笛。『楽学軌範』には、唐楽器として紹介している。約35cmの長さの縦笛で、約2cmのリードが付いている。指孔は表に7、裏に1の8孔である。農楽、宗廟祭礼楽、梵唄などに用いられている。大吹打において唯一の旋律楽器である。	打楽器	 龍鼓 (ヨンゴ)	両面鼓で、上の面を二本の桴で打って鳴らす。龍の模様があることから名前が由来した。軍礼や大吹打などの行楽に用いられる。
	 螺角 (ナガク)	法螺貝の大きいものの殻頂を切り、口金をつけて、吹き鳴らすようにしたもの。信号や合図にも用いられた。音程の変化はなく、単一音しか出せない。		 鉦 (ジン)	金属製の打楽器。紐で吊り下げて桴で打ち鳴らす。宗廟祭礼楽、農楽、巫楽、梵唄など幅広く用いられている。
	 喇叭 (ナバル)	長さ約120cmの円錐型の金属楽器で、指孔はない。管の長さは伸縮可能な仕組みであるが、大吹打では一音のみを出す。音色によって勇壮な効果を醸し出す。農楽にも用いられている。		 啫啫囉 (ジャバラ)	金属円盤を打ち合わせて音を出す。又の名は提金、孛囉。現在は、大吹打、仏教音楽、巫楽、舞踊などに用いられている。
		 杖鼓 (チャンゴ)		宮廷音楽から民俗音楽まで幅広く使われている。左の鼓面には牛皮、右の鼓面には馬の皮が張っており、桴で打ち鳴らす。又の名は、細腰鼓。朝鮮末期の大吹打には使用されたと言われているが、現在には用いられてない。	

本実践のねらいは、大吹打の特徴を理解し、鑑賞すること、そこで使われている楽器の音色を識別することである。教師は〈記録1〉のように、大吹打が行われている写真を見せながら全体的な雰囲気をつかませようとする。つぎに吹打手の服装に注目させ、彼らが黄色い天翼を着て、草笠を被り、腰には藍色の帯を締めていることを質疑応答によって確認させる。

そして教師は、大吹打を特徴づける楽器の一つである長さ約120cmの金管楽器（喇叭）に注目させると、子どもたちは、教卓に用意されている実物の楽器と視覚的資料が同一であることに気づき、「先生、吹いてみようよ」と音色に対して興味や関心を示す声があがる。

〈記録1〉

先生：大吹打は、いつ、どこで演奏される音楽だと思いますか？

K君：大吹打は、昔王様が御出座し的时候、また軍隊が行進するときに演奏された音楽です。(中略)

先生：(写真を見せながら) 一番前の人は執事で、「鳴金 一下大吹打」と命令を出します。すると、執事の後ろにいる吹打手、今でいうと軍楽隊ですが、この人たちが演奏をします。

先生：演奏する人の服装に注目してみましょう。

先生：どんな色の服を着ていますか？

児童ら：黄色。

先生：はい、黄色い天翼を着ています。

先生：どんな色の帽子を被っていますか？

児童ら：黄色。

先生：黄色い草笠を被っています。写真ではよく見えな

いですが、草笠には雉の羽を付けているそうです。

(中略)

先生：(写真を見せながら) この楽器、教卓にも用意されていますが、何でしょうか？

児童ら：喇叭(ナバル)。

先生：これですか？はい、そうです。この楽器を演奏している写真です。

複数の児童：先生、吹いてみましょうよ。

先生：吹いてみたいよね。音色を聴いてみたいよね。

それでは、実際にドラマで大吹打が奏でるシーンを用意しました。多分、誰が登場すると思いますか？

児童ら：王様。

先生：(映像を観ながら) 王様は御輿に乗って行って、前では軍楽隊の吹打手が奏でています。この音楽が大吹打です。

(しばらくの間、映像を観賞する)

先生：このように王様の御出座し的时候に、黄色い服を着た吹打手が行進しながら演奏する音楽は何ですか？

児童ら：大吹打。

教師は、大吹打の雰囲気から吹打手の服装や使用楽器へと全体から部分へと焦点をあてながら子どもの学習の動機づけをしていると考えられる。導入のまとめでは、NHK(日本放送協会)でも再放送中の韓国ドラマ「トンイ」の中で大吹打が演奏されている場面を取り上げ、教師と子どもとのかけあいによって、全体の雰囲気や服装を再確認し、曲名をもう一度喚起させる。

つぎに、実物の楽器を使って管楽器と打楽器に分類し、それぞれの楽器の持ち方と音の出し方を丁寧に説明する。

ここでも、子どもたちから「先生、音を聴かせてください」と音色に興味を示す声があがる。管楽器に関しては、教師による実演は避け、映像を使って音色を聴かせたが、打楽器のときは実際に教師自ら楽器を鳴らし、音を聴かせようとする。

そのあと、図3の楽曲のリズムパターンを口音(クウム:日本の唱歌の類)で唱えながら、アクセントと速度を感じ取り、曲の全体像を理解させよう試みる。

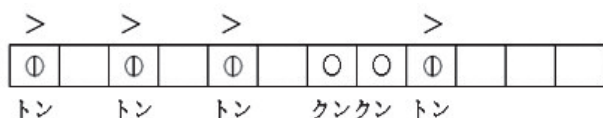


図3 大吹打の長短(12拍構成)

このように、大吹打について大まかな説明が終わったあと、視聴覚教材を使って曲を鑑賞する。鑑賞の途中からは、教師の指示に従って、子どもたちが打楽器類(龍鼓、提金、鉦など)を想定してこの長短を叩く。ここでは、楽器ごとに奏法が異なることを意識させる意図があると窺える。

〈記録2〉

先生：先に、男の人からやってみましょう。前は吹打手が立ち、後ろには王様。前に出て来てください。

先生：役になりきって行進していきましょうね。(一番前の子どもに)どんな楽器がしたいですか？

児童：太平簫。

先生：はい、どうぞ。後ろの人は楽器を持ったふりをして。じゃ、音楽に合わせて歩いてみましょう。

先生：(音楽が流れる)出発。王様の御出座します。(子どもたちが一列になって教室を一周する)ありがとう。じゃ、交代して、女の人もやってみましょう。

〈記録2〉のように、子どもたちは、いくつかの楽器を手を持って吹打手になりきった気持ちで、音楽に合わせて教室内を行進する。楽器を持たない子どもは、手拍子で図3の長短を打ち、王や王妃役の子どもは両手を後ろに組みながら気高く歩く様子が見受けられた。

そして実際に、喇叭と螺角を吹いてみる体験機会を設ける。子どもたちが前に並んで一人ずつ楽器を吹く活動に移る。音を出すことの難しさを体験した子どもは「難しい!」「無理、無理」といった声も出ていたが、唯一音が出せたM君には友だちから拍手があがった。また、普段の国楽学習に使われている小鼓(ソゴ)を取り出して、もう一度長短を練習したあとは、リズム感が上手な子を3人選び出し、龍鼓・嗜啼囉・鉦を使ってリズム叩きの手本を見せる場面もあった。

このような一連の活動が終わったあとは、評価の場面に移る。ワークシートには、大吹打の使用目的を問う項目、写真を見て楽器の名称を問う項目、そして音源(音色)を聴きながら楽器の名前を当てる問題など、知識・理解としてこれまでの学習を振り返らせる。

〈記録3〉

先生：今日の授業を振りかえて、どうだったのか、感想を発表してみましょう。

複数の児童：(4人の子どもが感想を述べる)

先生：最後に、先生が用意した映像を一つ観てもらいます。(世界軍楽フェスティバルの映像をながす)

先生：先生は今日の授業を準備しながら、この映像が皆さんに役に立つと思っていました。映像を観てからもっと誇らしい気持ちになりましたか？

児童ら：はい。

先生：これからも我が国の音楽をもっと愛し、世界に向けて伝播することが皆さんの役目だと思います。一所懸命に勉強して、素晴らしい文化をたくさんつくってくださいね。わかりましたか？

児童ら：はい。

授業の最後では、2010年アメリカのバージニア州で開かれた世界軍楽フェスティバル(Tattoo)で韓国の代表的な行進曲として大吹打が上演された様子と観客から拍手喝采を受ける映像を交えながら、自国の伝統音楽に対してもっと誇りをもって勉強に励んでほしい、という教師の願いを伝えることでまとまった。このことから、古典音楽を学ぶことの意義として、教師は子どもたちに、伝統的な音楽文化のよさや美しさに気づき、尊重する態度の育成に心懸けていることが窺えた。

子どもたちは授業全体の感想として、「大吹打に使われている楽器の種類や楽器の音を聴いてよかった」「喇叭と螺角を吹くことは難しかったけど、楽しかった」「大吹打の意味とどのような音楽かを知って、よかった」と授業に対して肯定的な発言を述べていた。

(3) 分析結果と考察

上記の通り、大吹打の授業実践の概略を述べた。以下は分析の視点に基づいてまとめる。

①古典音楽の教材(大吹打)は子どもの経験の発展にどのように機能したか。

朝鮮時代の軍礼楽として使われた大吹打は、子どもの生活とは遊離されており、日常では体験し難い音楽である。そのため教師は、大河ドラマ「トンイ」という視聴覚資料と実物楽器を教育内容と関連づけた教材の形態として提示することで、子どもたちと教材との隔たりを埋めようとしたと推察される。また、本来の音楽文化とは

異なる時空間であっても、実際に「行進してみる」「吹いてみる」「叩いてみる」などの活動を設定し、大吹打の疑似体験ができるような工夫を授業に取り入れている。

このように、子どもの実生活と切り離された大吹打をなるべく生活経験との関係性を意識させながら教材を再構成する過程を経ることで、大吹打の音色の識別という教育内容の達成に機能したといえよう。それらによって大吹打に対する理解も深まったと考えられる。

②子どもは教材とどのように関わりあってきたか。

授業過程の中で、教師は大吹打の長短を示しながら子どもに「龍鼓だと思って小鼓を叩いてください」というシーンがある。そうすると、子どもは小鼓を机の上に軽く置き、口音を唱えながら大吹打の長短を叩く。当然ながら小鼓の本来の打ち方ではなく、龍鼓の打ち方を真似して打つ。

授業では、大吹打の長短と音色を音楽理解の中心に据え、大吹打の使用楽器の奏法を真似しながら叩いてみるなど、身体表現を取り入れた活動を通して音楽を知覚・感受させようとする様子が見られた。

授業者インタビューでは、小鼓は主にリズム学習の教材として使われるが、時には代用楽器として用いることで本物に近づけると述べられていた。本実践においては、もっぱら長短の理解に助けとなる教材として使用され、机の下や教室のロッカーなどに収めており、いつでも持ち運び可能な状態にあった。つまり、授業過程の中で子どもたちの学習状況に基づいて臨機に応用できるリズム楽器でもある。そうした配慮が古典音楽の学習を知識だけにとどまらず、子どもの体験へ繋げてくれる架け橋の役割を果たしたといえよう。

なお、子どもたちは喇叭・螺角の音色に対して大変興味を示していた。この耳慣れない音が子どもにとって快か不快か、は定かではない。しかし、音色を古典音楽の学習の入り口とし、なおかつ直接楽器に触れることで、聴覚のみならず、五感を通した学習が可能となり、子どもたちは鑑賞態度が積極的に変わったと推察される。

2. 古典音楽の実践事例その2 《宗廟祭礼楽》

(1) 教材《宗廟祭礼楽》について

宗廟(チョンミョ)祭礼楽は、朝鮮時代の歴代王と王妃、そして国家に功績がある功臣達の位牌を安置する宗廟で、祭礼が進行される間に行われる歌、舞、音楽を指し、宗廟楽ともいう。祭礼楽として《保太平(ポテピョン)》と《定大業(チョンデオプ)》という組曲が種類の楽器で演奏される。

《保太平》と《定大業》の簡潔で力強い歌は、偉大な国家を建てて発展させた王の徳を称賛する意味合いを持っており、宗廟楽が演奏される間、文治と武功を象徴的に舞われる文舞と武舞が間に挟み込まれている。文舞は歴

代王の文徳を賛える舞で、《保太平》に合わせて、左手には笛の一種である簫(ヤク)を、右手には鳥の羽を付けた翟(チョ)をもって舞う。また、武舞は先王の武功を称賛する舞で、木剣と槍をもって《定大業》を伴奏に舞われる。

宗廟楽は、編鐘(鐘を高さの順に並べたもの)、編磬(調律した石を組み合わせたもの)、方響といった打楽器が主旋律になって、ここに唐笛、大琴、奚琴、牙箏など弦楽器と管楽器の装飾的な旋律が付け加えられている。この上に鼓、銅鑼、太平簫、節鼓、晋鼓などの楽器がより一層多様なリズムを奏で、歌が重なりながら、重厚さと華麗さを伝えてくれる。

(2) 授業実践の分析^(注7)

分析対象の授業は、韓国J道公立N小学校(5年生18名)で2013年9月23・24日の両日に各1時間実施された宗廟楽の学習である。子どもたちは宗廟楽の学習活動の以前に、主に民俗音楽の活動が中心となっており、古典音楽に関しては、第3学年において宮廷舞踊、第4学年で大吹打、そして第5学年の第1学期において宮廷及び上流階級の饗宴用音楽である《千年万歳》と《霊山会相》の学習経験がある(表2参照)。このように児童にとって、古典音楽の学習はある程度経験がある。そのため、宗廟楽の学習は既存の音楽的語法との不一致による情動的反応が予想されるものの、決して高いとはいえないであろう。ただ、授業前のインタビューでは、済州はソウルとは距離的に離れており、宗廟という場の雰囲気は児童には伝わりにくいと懸念していた。

そのため、一時間目ではバーチャルリアリティを利用して歴代王の位牌が祀られている宗廟の正殿を案内し、視聴覚資料を交えて宗廟祭礼楽を鑑賞しながら、音楽について大まかに説明していた。教師は打楽器のリズム、舞踊の動き、舞具などいくつかのポイントに注意を集中させる。ここでは、音楽の全体像を捉えることを目的とし、学習を深めることはしない。

授業では、宗廟祭礼と宗廟祭礼楽を理解すること、宗廟祭礼楽の歌・舞・音楽を体験することを学習のねらいとしている。児童は、四つのグループに分かれ、「音楽の始まりを告げる楽器〈祝(チュク):箱の底を棒で打つ〉と終わりに奏される楽器〈敵(オ):木像の背中の刻みをこする〉の色について(図4参照)」「音楽を演奏する楽隊の名前と位置について」「音楽に伴う踊りと舞具について」「宗廟祭礼の手順について」、それぞれパソコンを使った調べ学習に取り組み、調査内容を発表することで授業をまとめる。

この授業後の裁量活動(1時間)では、調べ学習を通してわかった基礎的な理解を参考に、深化学習に繋がるようにする。教師は改めて宗廟楽の様式に基づき、

楽章（歌）、楽作と楽止（楽）、保太平之舞（舞）、定大業之舞（舞）、と課題を決め、各グループに自由に選定させる。なお、楽器づくり、舞具制作、所作などを行い、それらを2時間目の授業で発表することにする。

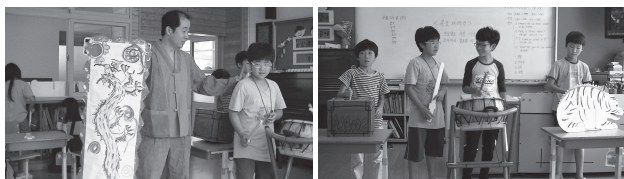


図4 宗廟祭礼楽の学習の様子（青い色の楽器が「祝」、白い色の虎の形をした楽器が「敵」である。）

〈記録4〉

先生：「楽章」を発表する友だち、前に出てください。

A君：私たちのグループは、楽章（歌）とは、楽章の内容、楽章の構成について発表します。楽章とは、宮廷あるいは国家の公式的な行事で使われた全ての歌の歌詞を意味します。宗廟祭礼楽の楽章は《保太平》と《定大業》で構成されています。偉大な国家をたてて発展させた王の文徳と武功を称賛する内容です。

B君：「迎神」「奠幣」「初献」は《保太平》を演奏し、「亜献」と「終献」には《定大業》を演奏します。

先生：昨日、歌の練習をしましたね。が、全曲ではなく、最初の部分だけです。じゃ、聴かせてください。お願いします。先の楽作と楽止のチームは前に出てください。音楽が始まる、執拍楽師の号令からお願いします。

複数の児童：（実演）

先生：じゃ、ここまででしたね。みなさん、「世徳啓我後（セトケアフ）：祖先の徳が我が子孫の道を開いてくれる」という5文字を歌うのに、どのように歌いました？

児童ら：長く。

先生：長く伸ばして歌いましたね。これが我が国の音楽（声楽）の特徴です。伝統歌曲を聴いてみると、このように歌います。時調も、聞いたことがある人はわかるとおもいます。このように、言葉を長く伸ばして歌っています。いいです。ご苦労様。

〈記録4〉は、宗廟楽の歌の部分にあたる「楽章」についての学習場面である。子どもたちは、グループ活動の調査内容をパワーポイントで発表し、実演に移る。実演は「迎神」の最初の部分であり、楽作と楽止（音楽の開始と終止）のグループの協力を得て、音楽の始まりに続いて「世徳啓我後」という歌詞を音源と一緒に歌う伴唱を行う。もちろん、ここでは宗廟楽のように節回しをつけて歌うことはできないが、声を長く引き、穏やかな速度で歌う非拍節的な歌い方に興味を示し、真似し

て歌おうとする様子も見受けられる。

楽章は、建国の偉業を讃える漢文歌詞に旋律を付したものであるため、子どもたちにとってその意を得ることが困難であろう。そのため、教師は「世徳啓我後」の漢詩を「祖先の徳が我が子孫の道を開いてくれる」と現代語に訳し、その意味を伝える。発表後は、歌について子どもたちと話し合う。ここでは、音を伸ばして歌う歌い方に注目し、それが伝統的な歌唱法の特徴であることを理解させる。

〈記録5〉

先生：今、左手で持っている短簫が籥ですね。そして、龍の頭が描かれている、これが翟ですね。皆さんは、友たちの舞を、映像と比較しながら見てください。（映像を流しながら）じゃ、旗を立てます。前で準備している人々が佾舞です。じゃー構えて、少し屈んで、お手は胸の前に組んで、ゆっくり右手の翟を持ち上げます。肩にのせて、もち一度、前の方に出して、少し屈んで、籥をもっている左手は胸に当てて、そして、両腕を胸の前に組んで、ゆっくり左手を伸ばして、まっすぐに伸ばしてね。前に組んで、もう一度、持ち上げて、回して、先の動きと同じです。回して3回。じゃー、方向を転回して、両腕を上げて下して、じゃー、ここまでにします。

先生：じゃ、皆さん、動きがどうですか？遅いですか、速いですか？

児童ら：遅いです。

先生：全体的に遅いですね。そして、動きはどうでしたか？力強い、それとも柔らかい？

児童ら：柔らかいです。

先生：全体的に、柔らかいですね。今皆さんが見たのが、保太平之舞です。保太平は王の何を称賛する歌詞でした？

複数の児童：徳、文、業績。

先生：じゃ、文化ですか、武功ですか。

児童ら：文化。

先生：文化的に、民が豊かに暮らせるように政治を行いました。穏やかな政治を行いました。世の中を安らかにさせる動きだと思います。最後に、定大業について発表してくれる友だちは前に出てください。

O君：文武が両方優れているとどうするかな？

先生：文武が両方優れていることは、その当時の王様においては理想でした。念願でした。文化的に優れており、将帥としての気質も高いことです。

記録5は、《保太平》に合わせて踊る舞、いわゆる保太平之舞（佾舞とも）についての学習場面である。調査グループは楽章、佾舞、舞具について発表した後、佾舞の実演

に移る。児童自ら制作した舞具を手に持ち、映像に合わせて舞う伴舞で披露する。教師は丁寧に舞振りを説明し、児童に真似させる。その後、所作の意味について話し合わせる。まず、動きが速いか遅いかという速度の知覚を分からせ、柔らかい動きか力強い動きかといった雰囲気を感じ取らせ、そこに込められている意味は文治で世を治めた王の徳を称える内容であることを全員で共有する。つまり、この場面では全体学習として展開しながら、音楽を形づくる要素の知覚と感受、そしてそれを取り巻く背景の内容を含んでいるといえよう。

一連の学習活動を通して、文舞は歴代王の文徳を賛える舞で、武舞は先王の武功を称賛する舞であることを理解したO君からは「文武が両方優れているとどうするかな？」と自ずと疑問を呈する声が聞こえた。O君は、一時間目は「音楽に伴う踊りと舞具について」を調べ、二時間目は文徳を賛える踊りである保太平之舞について発表している。このように、児童自ら興味関心のある課題を決め、調べた内容を、実演を通して発表した結果、宗廟楽を体得でき、音楽的理解が深まったと考える。

(3) 分析結果と考察

上記の通り、宗廟楽の授業実践の概略を述べた。以下は分析の視点に基づいてまとめる。

①古典音楽の教材（宗廟楽）は子どもの経験の発展にどのように機能するか。

宮廷音楽である宗廟楽の授業実践における指導者の意図は、児童自ら宗廟楽に内包されている意味を発見し、舞具や楽器を直接作る活動を通して宗廟楽を理解していく授業を構築していると推察できる。そこには知識の伝達ではなく、五感を用いた体験を重視し、歌・舞踊・音楽が一体となる教材の特性を生かし、総合的に扱っていることがわかる。授業後の感想文には「籥と翟をもって踊った。私たち自ら作ったので誇らしい気持ちになった」「宗廟楽に使われるものを直接つくり、やってみる時間をもった。(中略)授業を通して宗廟楽と少し親しくなった気がした」と、教材を身近な存在として位置付けている発言が多く見られた。つまり、宗廟楽がもつ教材としての機能は、歌・舞踊・音楽を通じながら伝統文化の理解につながる点にある。

②子どもは教材とどのように関わりあっていたか。

記録4、5の逐語記録からわかるように、宗廟楽を総合的に扱っている本授業では、知識の伝達にとどまらず、児童自ら調べる過程を通して発見し、楽器及び舞具などを作る活動を設けることで、なるべく教材と関わらせる授業構成となっている。そこには、歌・舞踊・音楽のそれぞれの要素を再現することに重点を置き、舞踊の動きの間違いやリズムの取り方などは特に気にしていない。再現のときには伴唱・伴舞によって行われるため、旋律

が内化しているとは言い難い面があるものの、子どもが教材を身近な存在として認識していることがわかった。

V おわりに

1. 結論と考察

今回、韓国の国公立の小中高校における国楽授業の観察調査を通して、朝鮮半島（韓半島）という風土の中で培われてきた多様な伝統文化を、学校教育において西洋音楽と同等に扱おうとする動きから、自国の伝統文化を尊重し、教育機関が一丸となって発展させる指導実践への可能性を実感した。さらに、知識・技能の向上を図った伝統音楽の指導にとどまらず、表現と連携した鑑賞や新しいものを創作する、いわゆる伝統文化の継承と創造への関心が高まっていることも感じられた。

その中で本研究では、学校教育において古典音楽を小学校の段階から伝統的な響きに触れさせることの可能性を目指し、韓国の伝統音楽教育に注目してみた。

小学校の段階から古典音楽を学習することに対して、韓国の教育課程および教科書編纂に関わりをもつ、ある教育大学の教授にインタビュー（注9）したところ、「（韓国の）学校音楽教育では、子どもたちに多様な音楽的経験の機会を与えることが重要視されている。それは伝統音楽にも同じである。例えば、大吹打は小中高において音楽科の教材として設定されている（注10）。その経験は一過性に終わるのではなく、螺旋型に到達目標を異にしながら発達段階に応じて再構成されていくことになる。」ということが述べられた。

本研究で取り上げた2つの授業実践においても、到達目標が明確に示されている。さらに、単位時間レベルで指導内容を具体化し、目標を教材と関連づけた形で学習活動を提示している。授業者から提供された指導案に基づいて確認すると大吹打では「大吹打の特徴を理解しながら鑑賞することができる」「音楽を聴いて、楽器の音色を識別することができる」とし、宗廟楽では「音楽的特徴を正しく理解することができる」「グループごとに宗廟楽の歌・舞踊・音楽を調査し、発表することができる」とされている。そこには「できること」と「わかること」を中心とした伝統音楽の知識と技能習得のための授業が構成されているといえる。

小島は、韓国の国楽教育の特徴について「音楽がどのように生成されてきたかを経験するというよりも、伝統音楽についての知識と技能を学力とし、形式的・文化的側面に技能的側面に集約された授業構造をもっている」（注8）と述べている。確かに、知識と技能は韓国の国楽教育における重要な教育内容の一つである。

ただしそれだけではなく、古典音楽を教材とする授業実践では、音楽を享受するにあたって受動的にならないように、教材と相互作用しながら積極的に関わり合う場

の設定が確認できた。例えば、大吹打の使用楽器を「吹いてみる」「叩いてみる」、または、吹打手の役になりきり「行進してみる」など、活動を通して教材の本質にせまっていけることがそれにあたる。

このように、現在の子どもにとって経験と遊離している古典音楽について、その独自の音色やリズム、様式などに興味関心を示せるように、発達段階を考慮しながら教育内容を構成していくことは重要であろう。

上述の実践では、授業過程において、鑑賞教材として示されている大吹打と宗廟楽を表現と連携させる形で再構成し、なるべく子どもの経験に繋がったことから、教材が教育内容の実現のために機能し、子どもたちの経験が深化、拡大、洗練されたと考える。換言すれば、古典音楽の特質に根ざした授業構成とは、多様な方法を通して子どもの直接経験を促し、その意味を再発見する試みによって、古典音楽と子どもの経験との不一致を解消される学習にほかならない。

要するに、古典音楽がもつ教材の特質に根ざした学習では、子どもが音楽とそのコンテキスト(状況・衣装・楽器・場・動き等)とを結びつけて体験することで、音楽的語法との不一致が解消され、音楽本来の姿にせまっていけることが可能となる。つまり、古典音楽の学習においては、音楽の諸要素のみを捉えるのではなく、音楽を取り巻く風土、歴史、文化の側面と音楽・言葉・動きをも取り入れた総合的な表現として理解していくことが重要であろう。

2. 今後の課題

本研究では、古典音楽の中で大吹打と宗廟楽の授業実践を取り上げているが、今後韓国の小学校における他の古典音楽の指導事例もさらに検討していく必要がある。なお、ここでは児童それぞれの変容過程について明らかにできていないが、児童らの成長過程を追う縦断的研究を行うことも意味をもつであろう。それは今後の課題としたい。

一注一

- 1 韓国の音楽科カリキュラムの特色と伝統音楽の実践事例は、日本学校音楽教育実践学会編『音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較-日本、カナダ、韓国、アメリカ、ドイツ、イギリスをめぐって-』音楽之友社、2012年に詳細に紹介されている。なお、韓国の学校教育における国楽教育の位置づけは、金奎道「韓国の民俗芸能カンカンソレの音楽科教材としての可能性」教育実践学論集第13号、pp.249-263に詳しい。
- 2 本研究は、平成24～26年度科学研究費助成による「日本の伝統音楽文化の特質に根ざした音楽科教材の開発と授業プログラム作成」(研究課題番号：24531158、研

究代表者：澤田篤子)の研究成果の一部による。

- 3 本稿における教材と教育内容の概念規定は、教材論の立場からアプローチを行う。そこで、教育内容とは、授業過程においての指導内容を含み、一連の教育活動を通して児童生徒が修得すべき知識や技能を指す。そして教材とは、その教育目標の達成のための具現化されたものであり、教育活動の中で行われる学習の媒介となるものであると捉える。音や音楽を媒介とする音楽科の教材は、一般的には教育内容を教えるために選ばれた楽曲であり、児童生徒に提示される「事実・現象・素材」の中で教育的経験に貢献する場合は、広義の教材と捉える。
- 4 長短とは、国楽において一定の長さのリズムパターンを指す言葉であり、拍数、拍の強弱、速度(テンポ)、アクセントの位置、フレーズ感をもっている。それゆえに長短が定めれば、音楽の輪郭と性格がほぼ決定される。
- 5 コールマンとハーグリーブス(Colman & Hargreaves)が熟知性と好みとの関係を表している逆U字型曲線は、初め、実験心理学の創設者と呼ばれるヴント(Wundt)が楽しさと刺激強度の関係を示し、後にバーライン(Berlyne)が快楽価と喚起性・新奇性の関係を呈示している。
- 6 大吹打の使用楽器についての説明は、徐漢範(1997)『改正版国楽通論』太林出版社、張師勛(1985)『最新国楽総論』世光音楽出版社、を参考に筆者が加筆し再構成したものである。写真は国立国楽院・伝統公演芸術振興財団制作のDVD『青少年が必ず理解すべき私たちの音楽と踊り15選』から引用した。
- 7 上記〈大吹打〉授業を研究としての妥当性を検証するために、古典音楽の教材と学年を別にして追加調査を行ったものである。改めて調査した古典音楽の学習では、儀式音楽〈宗廟祭礼楽〉を扱った音楽科授業を分析の対象とした。
- 8 小島律子の論文は、2011年韓国で参観した民俗音楽の器楽授業に基づいている。ここでいう、形式的側面とは音楽の諸要素とその組織化、内容的側面とは気分・曲想・雰囲気・イメージ・感情、文化的側面とは音楽の背景にあたる文化・風土・歴史、そして技能的側面とは、声や楽器の表現技能、合唱・合奏の表現技能、読譜などの知識・理解を指す。「韓国の学校教育における器楽の伝統音楽の授業構造」『大阪教育大学紀要第V部門』第62巻第1号、pp.31-44、2013に詳しい。
- 9 2012年11月9日実施の京仁教育大学・黄炳勳教授とのインタビューより。
- 10 鄭美英「音楽科教科書における大吹打に関する内容分析及び構成方案」『国楽教育研究』第5巻第1号、pp.151-179、2011によると、〈大吹打〉が教材として提

示されているのは、小学校1種(国定教科書)、中学校1学年は6種、2学年は2種、3学年は1種、高等学校1学年は3種の教科書にみられると報告している。鄭は〈大吹打〉の扱う全ての音楽科教科書を概観し、以下の8つの学習活動にまとめている。それは、「〈大吹打〉特徴を理解し、鑑賞する」「楽器の音色を区別する」「楽器編成について知る」「〈大吹打〉と〈吹打〉を比較鑑賞する」「長短を叩きながら鑑賞する」「行進及び演奏の様子を表現する」「〈大吹打〉と類似する異なる文化圏の音楽と比較する」「吹打手と執事について知る」などであり、初等と中等における教育内容が多少重複していること、社会・文化的背景について学習があまり組み込まれていないことが問題であると指摘している。

－文献－

- (1) 梶田叡一「我が国の伝統と文化の教育」人間教育研究協議会編『教育フォーラム42 伝統・文化の教育 新教育基本法・新学習指導要領の精神の具現化を目指して』金子書房, p.9, 2008
- (2) 澤田篤子「韓国のカリキュラムと授業実践」日本学校音楽教育実践学会編『音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較』音楽之友社, p.54, 2012
- (3) 金奎道「韓国の民俗芸能カンカンソレの音楽科教材としての可能性」兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科『教育実践学論集』第13号, p.250, 2012
- (4) 澤田篤子, 同上, p.87
- (5) 大元理恵子, 澤田篤子「児童における日本音楽の旋律の受容の様相―越天楽の場合(第1報)―」『大阪教育大学紀要』第V部門第42巻第1号, p.75, 1993
- (6) 伊藤真, 済川貴, 杉原歩, 堀江遥, 井内志穂, 栗木陽子, 岡田みなみ, 勝部遥子, 山本千尋「雅楽をテーマとした小・中学校音楽科授業の開発」広島大学大学院教育学研究科『音楽文化教育学研究紀要』X XIV, pp.11-20, 2012
- (7) 大元理恵子, 澤田篤子「児童における日本音楽の旋律の受容の様相―越天楽の場合(第1報～第3報)―」大阪教育大学紀要第V部門第42巻第1号, 第42巻第2号, 第43巻第1号, pp.75-87, pp.199-213, pp.77-88, 1993-1994
- (8) 村上理恵子, 澤田篤子「児童における日本音楽の旋律の受容の様相―謡曲『船弁慶』の場合(第1報～第2報)―」大阪教育大学紀要第V部門第46巻第1号, 第47巻第1号, pp.103-119, pp.153-164, 1997-1998
- (9) 奥田真丈, 河野重男監修『現代学校教育大辞典』ぎょうせい, p.348, 1993
- (10) 小島律子「生成の原理に基づく音楽科単元構成における『経験』と『教材』のかかわり」日本学校音楽教育実践学会編『学校音楽教育研究』第17巻, p.55, 2013
- (11) 八木正一「音楽科における教材とは」日本教材学会設立20周年記念論文集『「教材学」現状と展望(上巻)』協同出版, pp.250-261, 2008
- (12) 同上, p.259
- (13) 同上, p.259
- (14) 池永真義, 森永裕幸「来迎芸術で『思考力・判断力・表現力』を高める教育プログラムの開発」(第1報～第2報)―美術科と社会科の共同授業による鑑賞・表現活動を通して―大阪教育大学紀要第V部門第61巻第2号, 第62巻第1号, pp.105-116, pp.111-128, 2013
- (15) 小島律子, 兼平佳枝「音楽科鑑賞授業における「構成活動」としての「図形楽譜づくり」の教材性」日本学校音楽教育実践学会編『学校音楽教育研究』第14巻, pp.227-237, 2010
- (16) 同上, p.229
- (17) Hunt, J. McV 'Motivation inherent in information processing and action' In O.J. Harvey (Ed.), *Motivation and social interaction: Cognitive determinants*. Ronald Press, p.55, 1963
- (18) Leonard B. Meyer, *Emotion and Meaning in Music*, the University of Chicago Press, p.31, 1956
- (19) 波多野諄余夫, 久原恵子「音楽受容過程への認知心理学的接近」『国立音楽大学研究紀要』第1号, p.6, 1966
- (20) 同上, pp.11-12
- (21) ベント・オルソン「第15章 音楽教育の社会心理学」デイヴィッド・J・ハーグリーブス/エイドリアン・C・ノース編, 磯部二郎ほか訳『音楽の社会心理学 人はなぜ音楽を聴くのか』東海大学出版会, p.363, 2004
- (22) D.J.ハーグリーブス著・小林芳郎訳『音楽の発達心理学』田研出版, pp.98-123, 1993
- (23) 同上, p.120
- (24) 張師助『最新国楽総論』世光音楽出版社, p.359, 1985

－図版－

- 図1 D.J.ハーグリーブス著・小林芳郎訳『音楽の発達心理学』田研出版, p.134, 1993
- 図2 GUGAK : the Korean Traditional Music and Dance, National Gugak Center (DVD資料)
- 図3 大吹打の長短(12拍子構成)
- 図4 宗廟祭礼楽の学習の様子(2013年9月24日撮影)